

國學院大學學術情報リポジトリ

火葬をめぐる民俗学的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川嶋, 麗華, Kawashima, Reika メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002467

火葬をめぐる民俗学的研究

國學院大學大学院文学研究科 川嶋麗華

本研究は、高度経済成長期以前に伝承されていたノヤキと呼ばれる旧来の火葬習俗を中心として、近現代における火葬の伝承と変遷を民俗学的に分析したものである。習俗には伝承される“変わらない側面”と変遷する“変わってきた側面”の両面があり、民俗学的に分析するとはそれら「伝承 traditions」と「変遷 transitions」のありようを追跡することである。

葬送習俗は、柳田國男による「葬制の沿革について」(1929)をはじめとして、早くから多くの研究者によって注目され研究されてきた。ただし、研究の多くは土葬にみられる習俗や墓制を対象としており、火葬習俗や遺体処理に注目した研究はほとんど行なわれてこなかった。建築学や歴史学では施設としての火葬場の研究もあるが、火葬の実態については関心が払われていない。

日本国内では、かつては土葬による遺体処理が盛んに行なわれてきたが、高度経済成長期(1955-1973)を経て公営火葬場が広く普及し、現在では葬法(遺体処理法)の約100%が火葬となっている。それは単純に埋葬から火葬へという遺体処理の方法の変化だけではなく、技術と専門職への特化を伴った変化である。一方で、高度経済成長期以前にも北陸地方や広島県西北部といった一部の地域では、ヤキバやサンマイと呼ばれる地区の火葬場(野焼場)で住人によって火葬された。

本研究では、火葬場と野焼場という2つの火葬習俗に関する現地調査をもとに、第I章から第IV章にかけて各地域の事例研究を中心として分析した。序章で設定した6つの研究目的に沿って、終章では各章を跨いだ総括した。その要点は次のように整理できる。

(1) 村落におけるノヤキの実態

公営火葬場の普及以前に一部地域で行なわれた、地区の人たちが火葬するノヤキ(野焼き)の実態を追跡した。

ノヤキには、①藁や藎を使う蒸し焼き火葬、②薪を主に使うコロガシヤキ火葬、の2つがあり、そのうち①蒸し焼き火葬は、伝染病などの時に臨時的に火葬を行なう地域を含め、全国的に広く見られる技術であった。ノヤキでは生活燃料であった藁や薪を主な燃料として、近代に都市部で火葬炉が開発されて以後も多くの村落ではかつての穴や囲いなどの火葬施設(非火葬炉)が用いられていた。高度経済成長期(1955-1973)とその前後には、富

山県の上岩瀬のように A 従来の非火葬炉をレンガなどで改修する地域、富山県の触坂のように B 新しく火葬炉を設置する地域の両者があり、各地区で非火葬炉のノヤキの維持か、新たな火葬炉の受容か、その選択が行なわれた。石油燃料を用いる火葬炉を導入した少数の事例を除いて、いずれも場合も藁と薪を主な燃料とする火葬が継続されており、生活燃料の変化と火葬燃料の変化は必ずしも密着連動した相関関係にはなかった。

担い手は、血縁的関係者や地縁的関係者による相互扶助的な火葬と、専門的職能者による業務委託の火葬があった。変化の過程で一時的に土葬から火葬へと移行した地域でも、従来埋葬を担っていた相互扶助の関係者がそのまま火葬を担うなど、遺体処理の相互扶助的な関係が引き継がれた。また、専門的職能者による業務委託火葬をしていた地域でも、事情によって相互扶助火葬に移行した地区もあり、業務委託火葬から相互扶助火葬へという変化も事例によっては生じていた。そのような相互扶助火葬、業務委託火葬のいずれでも、点火と拾骨のみは家族や親族が行なうとする習俗が多くみられた。

(2)火葬炉の成立と火葬場での火葬習俗の実態

近代以降に成立した火葬炉と火葬場での火葬習俗について、3 地域の火葬場における火葬の実態、うち 1 地域における火葬場の受容とその動向の実態を追跡した。

高度経済成長期には日本各地の多くの地域で自治体によって町営・市営火葬場が設置されたが、それよりも早くから人口増加が起こっていた都市部及びその近郊部では、自治体に先行して有力者などによって民営火葬場が設けられた。それらの民営火葬場の多くは、戦前までに寄付や買収によって公営火葬場となったが、現在も民営火葬場として地域の火葬を担うところもある。そのような火葬場は、公営火葬場の代わりに、または公営火葬場が対応しきれない需要に応じるかたちで多くの火葬処理を担ってきた。

東京・京都・大阪などでは明治期に施行された法令の指針に則って煙突付きの火葬炉をそなえた火葬場が設置された。火葬をめぐる大きな流れとしては、火葬炉ではない火葬施設を用いるノヤキから火葬炉による炉焼きへという変化が起こった。本論文で取り上げた 3 事例の火葬場では、いずれも時代に合わせて新しいものに改修されており、それにとともに薪から石油燃料やガスへと火葬燃料が変化した。火葬の技術は、現在は火葬炉へ棺を納める作業から骨拾いの準備までの一連の火葬作業の多くを機械で制御ようになってきているが、火葬の担い手は経験とそれによる技術の習得が求められ、それが現場ごとに実践されている。

担い手の変化に注目してみると、現在は火葬場での火葬の受容によって地縁的関係者に

よる相互扶助火葬から火葬場職員による業務委託火葬へと大きく変化している。ただ、島根県邑南町の公営火葬場の事例のように利用地域の中から数名のボランティア的な担当者が火葬場職員として火葬作業を行っていた時期があり、火葬の担い手はその地域社会から選ばれるのがよいという伝承が引き継がれていた。

(3)ノヤキを残した地区における葬送習俗の動態

平成に入っても村落での火葬であるノヤキを継続していた広島県の筏津地区と愛知県の旧八開村域における事例から、同地域でノヤキを継続した要因と葬送習俗の変化を追跡した。

広島県の筏津上では、火葬を含めた葬儀の一切を講中が担うという伝統を維持したいとする講中の結束の固さ、つまり講中自身がその存在意義を維持継続したいという内発的志向性によって、愛知県の旧八開村地域では、火葬という役が歴史的に専門職能者の権利として地域社会でも相互に了解されたものであり、それが平成初期の時点までこの地域で伝承されていたことを背景として、それぞれノヤキが継続されたと考えられた。これまでの研究では、公営火葬場から遠い地域ほど公営火葬場の利用が遅くなるなど、公営火葬場の利用地域について一般的な変化の遅速などの傾向性が指摘されてきたが、葬儀する個々の現場社会で観察してみると、それぞれの地域社会がその社会の持つ歴史的な背景とそれを維持しようとする論理によって選択が行なわれていたことがわかった。そのため、必ずしも同一の地域的広がりの中でのすべての地域社会が同一の選択を取るとは限らないといえる。

葬儀の変化については、1960年代以降の葬祭業者の関与の段階差として、第一段階としては葬具の提供（道具）、第二段階としては葬祭サービスの提供（手間）、第三段階としては葬儀場の提供（場所）、の段階があることを提示した。その関与の状況から、葬儀の場所が変わると場所の管理者が葬儀の主導権を握ることになり講中中心の葬儀が崩れやすくなるが、筏津上では、講中の葬儀を継続するということを目的とした地域の対応として、一律に葬祭サービスを受容するのではなく、業者による葬祭サービスの受容と地域での補填という講中による自主的な選択が行なわれた。

(4)土葬習俗地域における開発と葬送習俗の変化

両墓制を伴う土葬を伝承してきた福井県大飯郡の大島地域における高度経済成長期前後の土地開発と葬送習俗の変化を追跡した。

原子力発電所の設置にともなう開発によって、従来のような海上の船便ではなく陸路に

よる他地域との移動交流が可能となり、順次火葬へと移行していった。1970年代以降の火葬の受容に伴ってサンマイに埋葬することはなくなったが、現在でも夫婦墓の墓石をもつ家では依然としてサンマイへの埋骨を行なっており、家単位の墓に変化した家でも花輪や卒塔婆が古いサンマイに投棄されており、サンマイの利用は部分的に継続しているといつてよい。また、埋葬時に利用していたソウレンカイドウで小銭の散布や霊柩車への積載をしており、かつての葬列等の習俗の構成要素の一部を部分的に残し継承している点もあり、民俗伝承の変化は事例ごとに相異はありながらも段階的であるという特徴があることを指摘した。

(5)火葬場での火葬の受容に連動した葬送習俗の変化

公営火葬場の利用に至るまでの地域の動向と火葬場での火葬へ移行したことによる葬送習俗の変化を追跡した。

公営火葬場の利用は、単に火葬場の設置によって受容されるのではなく、土葬地域だけに限らずもともとノヤキを行なっていた火葬地域でも見られた火葬場での火葬に対する忌避感や、専門的職能者の引退の時期など、公営火葬場の設置とは異なる理由に依る場合があり、各地域によって異なる展開がみられた。公営火葬場の利用による変化には、埋火葬の遺体処理方法、遺体処理の担い手など、さまざまな変化があるが、その中でも火葬による遺体処理をする場所と時間の変化が葬送習俗に影響を及ぼしている。たとえば埋葬地までの葬列を伝承していた地域では、火葬場の利用によって遺体を埋葬地まで運ぶ必要はなくなり、代わりに遺体を霊柩車で火葬場まで運ぶ必要が生じた。しかし、火葬場の利用に移行して以後も埋葬地に放置していた膳を火葬場に運ぶようになるなど、火葬場の利用にともなう条件の変化に対して、各地域で柔軟に対応をしながらかつての習俗を少しずつ残すという動きがあった。このように民俗伝承の変化は事例ごとに相異はありながらも段階的であるという特徴が指摘できる

葬儀の担い手、流れと構成、場という点では、火葬場の利用よりも葬祭ホールの利用を契機として大きく変化している例が多くみられた。公営火葬場の利用による大きな変化の1つとして注目されているのが、火葬後に葬式を行なう遺骨葬である。遺骨葬は公営火葬場の利用以後に行なわれるようになった習俗として注目されており、旧来の火葬地域では遺骸葬、旧来の土葬地域では遺骨葬が行なわれる傾向性が指摘されている。ふるくからノヤキを伝承してきたとされる地域では、ノヤキの時期と公営火葬場の利用開始以後のいずれでも遺骸葬であった。広島県の旧大朝町と隣接した島根県の旧瑞穂町という狭い地域で、

火葬地域では遺骸葬を、土葬地域では遺骨葬を行なうという同様の傾向性がみられた。

(6)野焼場と火葬場での火葬との伝承と変遷

野焼場と火葬場での火葬の両者から火葬をめぐる伝承と変遷の動態についてあらためて整理した。

野焼場では藁による蒸し焼きの火葬によって火力を長時間維持させることで時間をかけて骨化させたが、火葬場では薪や石油系燃料の火力による火葬によって短時間で骨化させるようになった。火葬の担い手は、それぞれの現場で火葬によって遺体をきれいに骨化させるために、自身の経験や指導による技術を習得し修練している点は共通した。特に、人体の焼け残りやすい頭部や腹部に対処する技術などを保有し伝承している点が注目された。野焼場ではすべてを手作業で行なうのに対して、火葬場では機械制御によって行なうが、火葬場でも遺体の体格や体質に合わせた担い手の技術と工夫が必要とされていた。ただし、野焼場では「骨にする」ことを重視しているのに対し、火葬場ではよりきれいな形で「骨を残す」ことを重視している傾向がある。

火葬習俗において、遺体を焼くというのは一連の行為だが、その前後には点火と拾骨という儀礼的な部分が存在した。ノヤキにおける点火と拾骨は一定の決まりごとに沿って家族と親族によって行なわれてきたことが広く共通しており、現在のように火葬場での火葬場職員による火葬に変わった後にもみられるが、点火は公営火葬場の職員が行なうという例も近年は多くなってきている。

点火と拾骨という行為が儀礼化してきていたという事実からは、葬儀はもともと家族や親族が行なうものだとする社会的規範が存在していたこと、点火と拾骨という行為が慣習となりその慣習が儀礼化することによって保存伝承の力を強くしていること、が考えられる。つまり、火葬における点火と拾骨からは、行為は儀礼化することによって古い慣習の伝承力を強くしていることがわかる。現在の火葬場での火葬では、家族や親族による遺体処理の役割が拾骨という1つの動作に集約されており、だからこそ現在の火葬場では、家族や親族による遺骨との対面と拾骨が重視され、現在では拾骨がより顕著に儀礼化してきていることが指摘できる。

野焼場と火葬場には、部分的にはあるが相互に特徴に共通点がみられ、近代以降に設置された火葬場が各地に伝承された野焼場の習俗をふまえて、歴史的な展開の中において成立してきた過程を残していると捉えられる。しかし、野焼場では、火葬の担い手である専門的職能者にその地区の野焼場まで来てもらい火葬するが、火葬場では、利用者側が可

能であれば必要に応じて火葬場を選択し火葬場に行って火葬する点に違いがみられる。また、野焼場では村落内の相互扶助の火葬の場合も、専門的職能者への委託火葬の場合も、いずれも継続的な関係性の人々によって遺体処理がなされていたのに対して、火葬場では葬儀と火葬のそのときだけの一時的な関係性の人々によって遺体処理がなされているという点にも大きな違いがみられる。野焼場は忌み避けられるものであったが、その場の管理者は利用者自身であり、自分たちの問題であった。しかし、火葬場の利用に伴って利用者と火葬場が隔絶する中で、そのような遺体処理に伴う問題も外部化してきたものと捉えることができる。